
希望の未来へ！～少年たちの武勇伝～

空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

希望の未来へ――少年たちの武勇伝――

【Nコード】

N3898M

【作者名】

空

【あらすじ】

20xx年の夏休み、なな、たいち、夢、和樹は一年後の未来からきた

少年、陽と会う。

その出会いから、少年たち、いや国の未来がかかった
大冒険が始まった――！

この物語は 未来を変えるため
命をかけた子供たちの武勇伝である。

登場人物紹介（前書き）

・この物語は中国が日本の植民地化をねらっているという事実から作った物語です。

・この作者はまったくもっての初心者です。

登場人物紹介

登場人物紹介

主人公

一野 なな 12歳

好奇心旺盛で仲間思いの少女、けっこうたくましい面もある。たいちとかずきは幼なじみ。

盛岡 たいち 13歳

第二の主人公。

勇敢で負けず嫌い、そして夏にはきつい熱血少年。

仲間

里村 かずき 11歳

なののクラスメートでマイペースで臆病。でも、宝探しの時は早い。体力があまりない

盛岡 夢 8歳

たいちの妹、兄思いでやさしく明るい少女
さみしがり屋。

石川 陽 10歳

未来からきた少年、陽気で我慢強くお調子者。
すぐに誰とでも友達になれる。

陽との出会いそして、冒険の幕開け――

今日は夏休み前の終業式だった。七葉はたくさんの荷物を担いで明日から何をしようかとわくわくしながら、帰っているところだ。

「やったあ！ あしたから夏休みだ！ よーしあそびまくるぞー
――！」

と、そう言いながら次のまがりかどをまがると・・・

「あつ、あいすが売ってある！たべたいなあ、そうだ！いいことかんがえた！」

アイスクリーム屋さんを見つけ、やたらと一人ごとがうるさい七菜はアイスクリームを売ってある小さな屋台に駆けで行った。

その後

「おばさん！あいすちようだい！」

「いいけど、ななちゃんおかねは？」

「ああ！そのことなただけど。．．．．．あとばらいというこ
とで．．．」

「じゃあむりです！」

「えええええゝゝそんなああ……」

ちえーと口をとがらせている七菜。でもしかたないあしたくるか！そうけついで、

「じゃああしたきますんで！」

びしつと敬礼して、七菜は走り出した。こんどは幼なじみのたいちを迎えに行くのだ。

「あつ見えてきた！たいちの中学だ！」

そういつてとばすとなんと真っ正面から、たいちがつっぱしってきたのだ。

しかし止まるうにも止まらず、

「わああああ」「どつどいてー！ー！」

どつしゅん

あんのじょうぶつかってしまった。

「いてて・・・あ、たいち、ごめんねだいじょうぶ？」

しかし、へんじがない。

「たつたいち？」

もういちど声をかける。するときがついたようだ。たいちはむくつとおきあがる。

「いつてえなあ・・・おう、七菜じゃん。」

「まったく心配かけないでよ」

七菜はおこりぎみでいったが内心

（よかったあ）

と安心していた。

それから・・・

ふたりは公園にいた。ついでにたいちの妹、夢と七菜の友達、和樹もいっしょだ。4人は公園の4つちょうど座れるブランコにそれぞれ

れのつてディーエスの対戦ゲームを、たいち兄弟チームと七葉アンド和樹チームにわかれてやっていた。

たいちが、

「おおおお！もえるぜー！」

ピンチなのにそうさけんでしていると、空から

「わああああ、たすけてえー」

と声がした。ん？と思ううえをたいちたちがみあげると・・・。

「ぎゃああ」

どつすーん

少年が空から降ってきたのだ。みんなはあぜんぼうぜん、言葉もない。

「おつおまえ、だれ？」

ようやくたいちが口を開く。少年は帽子をかぶり、にかつと笑い笑顔で、

「おいらは、よう！石川陽だ。未来からきたんだ！よろしくな。」

「えええー！ー！」（一同）

「みらいからきたの？」

夢がきく。陽はとーぜんでもいうような顔で、

「そうだよ、で、お前らにたのみたいことがある。」
「といういきなりシリアス顔になった。」

「実は…、おいらと未来を変えてほしいんだ!!。」

たいちは、もしかしたらと思い、昨日の夜みたの夢のことをおもいだした。その夢では、なんと日本、中国大陆、がしずんでいき、みんな大パニックになっていた夢だ。たいちは、陽に聞いた。

「なあ陽、その未来ってまさか…日本がしずむとか…じゃあないよな」

おもわず顔が引きつる。陽はびっくりしてこたえる。

「えええ！しってるのか！お前みらいのにんげんか?!」

陽はたいちに顔を、ちかずける。たいちは陽を引き離し、

「ということはあたってるのか…。」

「なにが？」

和樹がのんびり聞く、するとたいちはゴォと燃えて和樹の問いは聞かずに言う。

「おれたちがみらいをかえるんだよ!!」

和樹はびっくりして後ろに下がった。たいちがあついのだ。七菜は燃えているたいちをみて、思わず大声で

「やってみようよ!」

とみんなに向かつてやる気満々にさげんだ。陽は顔をきらきら輝かせて七菜とたいちのをにぎる。

「ありがとう!こころ強いぜ。」

といいながらにぎった手をぶんぶんふる。七菜はとーぜんといい笑っていた。夢は、その後ろで燃えている。

そして和樹は(大変なことになったなあ・・)と少し不安おもいながらベンチに座つてのんびりディーエスをしていた。

次の日、長い夏休みがついに始まった。陽もあわせ昨日のメンバーたちは、クーラーのきいたすずしい七菜の部屋で冷たいジュースを飲みながら半分遊びながらも陽のいたやどうしてここにいるのかなどを話し合っていた。

「どうして陽君は私たちのところにきたの?」

夢が一番のきもんを聞く、

「まあそれは、ぐーぜんだ」

陽はさらりと言う。夢は(きかなくてもよかったかな)と思っていた。続いて和樹が質問する。

「じゃあ、どうやってこつちに?」

「んー話せばながーくなるんだがな」

そついうと陽は七菜のへやのすみに置かれていたおもちゃのギターをかりて語り始めた。

陽がどうしてこっちに來れたのか、それは日本と中国大陆ちんぼつの日、陽はその日から運良く2日

間家族と海外旅行に行っていた。そして日本に帰ろうと空港に行く、そこで日本行きの飛行機はどこでのれるか探すのだが日本行きの飛行機はすべて”飛行中止”、陽一家はインフォメーションの人に聞きに行く。

英語が得意な陽のお父さんがどうして日本行きの飛行機が飛行中止なのか英語で聞くと、その人は英語で

「お気の毒に」

とそのひとはそれだけ言うとお父さんに今日の朝刊の英語の新聞をわたす。

そこには英語で、（お父さんが翻訳）

ちんぼつ?!日本と中国大陆!

と大きく見出しがついていてその横にはどこでとったのか大きな津波に飲み込まれそうなちんぼつすんぜんな日本の写真がおおきくのっていた。

陽はこれを見てうそかと思った。でも写真はどう見ても本物、でも陽は信じきれなかった、

いや信じたくなかったのだ。

陽は「こんなのうそだー!」

とさけんでその場をとびだした!

陽は空港を飛び出し、にぎやかな町並みを走り抜けるとのどかな田舎についた。そこでやっと落ち着き

ちかくの小川のどてに座る。陽が小川の流れをじっと見ていると、

「おぬし、今をかえたいか?」

そう声がした。

「え?」

陽はふりむく、そこにはちよつと無愛想な杖をついたおばあさんがたっていた。

「は、はい。でもあなただれ?」

「わしか? わしは過去と未来を見たり自由に過去と未来を行ききできる時の使いだよ」

時の使い・・・? 初めて聞く言葉だが、陽は疑いもせず

「お願いします!」
と頭を下げた。

時の使いのおばあさんは顔を少しほころばすと

「ついてきなされ。」

とくるりと回れ右をし歩いていく。

「はいっ」

陽は時の使いの後について行った。

陽は古びた時の使いのおばあさんの家の何もない部屋にいた。おばあさんの説明が終わり、今を変えるため過去に送り出してもらった事になったところだ。

「チャンスは一度きりだぞ。」

「はい！」

この会話を最後にして時の使いは銀色に輝く杖を振り上げ

『このものを過去に導きたまえ！』

と叫ぶ。その瞬間！

陽はなぜか空から落下していた。

「と、言うことだ、どーだ長かっただろう。」

自信満々に言い終える、そこでたいちが聞いているのに飽きたか

「よし、じゃあさどうやって未来を変えるか考えようぜ！」

とごおーと燃えながら言った。七菜はあつくてたいちに文句を言う。

「たいち、暑苦しいからやめてよー。」

七菜の冷たい一言にもかかわらず、

「じゃあ陽、何かあるか？」

と聞く。

「ふっふっふ、その一言を待っていたぜ！実はこのペンダントを使って日本が沈む二日前の日本へ行けるんだ！」

陽は真ん中にごぼうせいが描かれている七色に光る不思議なペンダントをかざして見せた。

「それじゃあ、最初からそうしたら良かったんじゃない？」

そこで、夢の鋭いつっこみ！

「う、まあそれはなあ時の使いのばあさんに聞いてくれよなー。」

陽は笑ってごまかしていた。

つづく！

未来の日本へ！（前書き）

文字がなぜかずれているところがありますが、すみませんそこそこよろしく願います

未来の日本へ！

陽のかざしたペンダントはキラキラと輝いている。

「で、それを使ってどうやって未来に行くの？」

そう七菜が聞くが陽は「・・・」とまさかの知らないという状況で黙っていた、と思うと

「すまねえ、わ・か・ら・ん！」

と笑う。それを見た夢は何がおかしいのか笑っていた。

「ねえ、気分転換に外に行こうよ。」

和樹は退屈でしょうがなかったらしい、話を切り出した。

「ということで今は川にいまーす。」

七菜と夢が声を合わせてどこかに向って言う、そして川でいろいろと遊んでいると、

ピカッ、パアアアア！

陽のペンダントが光りだした。七菜はまぶしそくに目を細める。

「なっなに?!」

そして周りが七色の空間に包み込まれたかと思った次の瞬間、五

人は曇り空の下、どこかの知らない住宅地の公園の真ん中に立っていた。

「ここは、もしかや未来なのか？」

たいちが言つと陽が声をひそめて言った。

「うん、ここはおいらん家の家の近くの公園だ。」

「ねえどうして声をひそめているの？」

七菜が聞く、陽は人差し指を口の真ん中に当てて

「しつ言っていないかったけど今日は中国の植民地にされて日本全体に中国の監視人がいるんだ。だから変な動きはできない。」

「じゃあどうするんだ。」

たいちが言つと夢がひらめいて

「そうだ！ここで遊んでみようよ！」

と笑顔で言つた。たいちは妹に一喝する。

「あほ！遊んでどうするんだよ！」

「違う違うここで遊ぶ振りをして様子を見るの。」
チツチツチと夢は指をふる。

「様子をみるにはかくれんぼがいいよ。」

和樹が提案してくれ、五人は陽をおににして、かくれんぼを始めた。

いちおう始めてはみるのだが周りでは何も起こらないし、人の声すらしない。七菜は怖くなって一緒に

木の上に隠れているたいちに声をかけた。

「ねえなんか変じゃない？ 気味悪いし」

「うん、変だよなー。よし、このオレがどっかの家にチャイムを押してこようか？」

「あ、いいね。やってみよう！」

それから五人は誰かの家の前に立っていた。陽がなにかを思い出して小声で

「あ、そうだ。これから日本語はつかっちゃだめだオイラがこの家の人が出てきたら中国語でしゃべるからお前らはだまつといてくれ。」

「なんで？」

かずきがのんびり聞くと、

「*~-* \$ # & ”」

と意味不明な中国語で答えた。

そしてなながピンポンとチャイムを押してみる、しかし誰も出てこない。

（いないのかなー）

心の中でつぶやきながらもまたピンポン、ピンポンと連続で押しまくっていると、どこからか兵隊

の服を着た人達がこっちに向かって走ってきた。陽は慌てて七菜たちに日本語で言う。

「やばい！あれ、オイラたちを捕まえに来た中国人だ！」

でも、たいちは恐れずにこう言った。

「よし！このオレがあの人を倒してやる！」

つづく――！

未来の日本へ！（後書き）

作者です。ここまで読んで下さりありがとうございます

二章からは章の中をわけて書こうと思います、

それと

なな&たいち「感想おまちしています！-！」

だそうですよーま、そういうことでよろしくお願いします！

最悪の事態（前書き）

「おい！お前らオレ達に何か用か？！」

たいちは勇敢に中国の兵隊にむかって言うのだが・・・！

たいち「ん、どうなったかって？それはこの小説を読んでみしてくれ」

最悪の事態

「やめといた方が絶対いいよ、身のためだよー」

夢が泣きつきながらたいちに言っただが無理だった。

たいちは中国人兵隊の前に立ちはだかる。

「おい！オメーら、オレ達に何か用か！」

中国人は立ち止り、一人が銃をこちらに向けて

「%\$#^&%’」

良く分からない中国語をしゃべった。

「おとなしくしろ、はむかうなら打つぞって言うてる」

陽は小声で七菜たちに説明した。七菜は頭の中が恐怖でどうにかなりそうだった。たいちはというとまだ

やるきらしい、中国人の兵隊はもう一度中国語で

「お前たちを殺すぞ！」

とおどす、たいちもやばいのが分かったか、ななたちの方に振り向く。

「これって逃げた方がいいのか？」

とびみょーに笑いながら聞いてきた、ななは

「あつたりまえ！逃げるよ。」

と怒ったような顔をして言う、それを合図にみんなは一目散に逃げ出した！中国人の兵隊たちは逃がすまいと追いかけてくる！

「ぎゃー！追ってくるー！」

七菜は頭がパニック状態だ、でもかずきはふうふう言いながら冷静に

「とりあえず、ペンダントを使ってもどろつよ」

と言う。かずきはのんびり屋なのだが、こういう時にはみんなが思ってもいない事をひらめく。

ナイス！かずき！たいちが喜んだのもつかの間、それは陽が

「だめだ！これ一時間たたないと戻れないんだ！」

そうペンダントのタイマーをみながら言ったからだった。

「あ！あそこに森がある！」

夢がゆびを指す、住宅地をでたすぐ横の森に五人は駆けこむ。

七菜が走りながら後ろを振り向くと中国人の兵隊たちはもういない。

（よかったー。逃げ切れたんだ）

垂れる汗を腕でふきながらホッとしていた。

とりあえず、ここで休憩を取ることにした。

森の中はしーんとしている。木々はキレイにそろえられていて動物一匹も見当たらない。

たいちは荒れた息を整えるとみんなの方を向いて申し訳なさそうに下を向き謝る。

「ごめん、オレのせいでこんな事に・・・」

陽はたいちのところに歩み寄ると二カツと笑いポンと肩に手を乗せる。

「大丈夫だよ。だってみんな無事じゃん」

「そうだな、これから気を付けるぜ」

とたいちは顔を上げ言つと、森のすぐ近くからパアーン

と銃で撃つたような大きく鋭い音がした。

五人はビクツとして音のした方に行くとなにか工場みたいな建物が見える、でもそれ以上行くのはやめた。なぜかという・・・

「あれって——」

夢が震えながら怖い物でもみたような顔になる。そう、柵の向こうに見える、人の残酷な姿だった…。
陽は、ハツとする

「げっ、ここは肅清所だ！」

つい大声で言ってしまう、ななはひやひやする、中国人に見つかり
そうだったからだ。

「!、\$%#!、’&(、・、!」

ふいに意味不明な中国語が聞こえた、五人は真つすぐその声にした
ほうをみる、その声の犯人は残忍な顔をした二メートルはある巨人
の男だった。

最悪の事態（後書き）

どうもありがとうございます

夢「あー、兄ちゃんのせいでやばいことになったちゃった」

危機一髪！！（前書き）

ふいに意味不明な中国語が聞こえた、五人は真っすぐその声にした
ほうをみる、そ

の声の犯人は残忍な顔をした二メートルはある巨人の男だった。

危機一髪！！

「「「「わあああああ！！！！」」」」

なな達は叫びながら一目散に肅清所しよくせいじょとは反対方向、森の奥深くへ逃げていった。

後ろから声がする、たいちが逃げながら後ろを見ると中国人が追って来ていた！

「やばいぞ、追ってきた！！」

「ねえ陽、もう一時間たった？」

きつそうにぜいぜい言いながら、かずきが言う。

「くそーまだだ。あと一分」

陽はくやしそうにタイマーを見て答えた。

森はどこまでもとは続かなかった、そうついに・・・

「いきどまりだああー！」

先頭を走っていたたいちが、もうやばい！というような顔で急ブレーキ。陽はさつとタイマーを見る

・・・あと三十秒だ

「＃”％\$＆”＆”）（ゝ^！」

中国語がすぐ後ろから聞こえた。なな達は振り向く、本当はあつてほしくなかったけど。

五人の目の前に立っていたのは、あの残忍な顔、巨人な体の中国人だった。

そいつはピストルをこちらに向けると

「**::*\$）ゝ”」

と顔をしかめて言う。陽がそれを通訳しようとした時！

パン！ パン！

鋭く耳をつらぬくような音がし、ピストルから白い煙があがる。中国人はピストルを撃ったのだ。

その玉は間一髪かずきのすぐ横の木にあたっていた。

「ひえゝゝ」

かずきが震え上がり、中国人はチツと舌打ちをすともう一度ピストルを向け撃とうとした、その時！

「よし、戻れるぞ！」

陽が嬉しそうに言うのと同時にペンダントから出る七色の光がなな達を包むと、消える

中国人はびっくりして声もせず、たださっきの五人が消えた場所をボー然としてみていた。

気がつくと五人は元の遊んでいた川の所にいた。

ななは改めてこの平和な日常に感謝する。夢はたいちにしがみついていて、
あらためて

「怖かった……」

と涙目で言う。

「よしよし、もう大丈夫だぞ」

たいちが小さい子を扱う様に言うと夢はそれを恥ずかしく思ったか

「私は赤ちゃんじゃない！」

とパンチを思いっきり陽の溝に打ち込んでやった。

「うぐっ……」

「大丈夫？」

ななが心配して、うずくまるたいちに声をかける。

「おう！大丈夫だ」

シャキン！と立つ、なんという回復力だもう元気になっている

陽は落ち着いたみんなを見てあせをぬぐい爽やかに聞く。

「どうだった？日本の未来は」

みんなは口をそろえて

「最悪ーーーー！！」

と答えたのだった。その声らが空に響いていた。

危機一髪！！（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます！

これで、第二章は終了です、次からは第三章 行動開始！になります

すみません、ストーリーがぐらぐらなくなっちゃいましたが、次からはふつーですよー

プールで遊んじったりします。暑いんでねー
でも、行動開始です（プールで遊ぶけど）

ストーリーではいよいよ本格的になっていきますが、どうか暖かい目で見守っててください！

行動開始！

ピピピピピ

デジタルの目覚まし時計が鳴る、たいちはその音でうつすらと目を開けた。

「今、何時だ？」

そう言って目覚まし時計に目を向けるとなんと

午後五時だった。

「・・・は？五時？夕方の？」

たいちは少し混乱したが、昨日の夜間違って午後の五時にしてしまったのを思い出した。でもその時はかなり眠かったからなあ・・・。

「うーん自分でも驚くぜ、まさかまさか夕方まで寝られるとはなあ
！」

窓を開けのんびりとまだ青空の広がっている夏の空を見上げる。

（あ、でも今夜は寝れないかもな。何しようか）

たいちが何かをたくらみ始めていると、部屋の間口からドタドタと走ってくる音がした。

「ん？」

たいちは振り向く。その音はドアのところで止まりバン！と勢いよく夢がドアが開いた。

「お兄ちゃん！秘密の話があるって、今すぐ公園に来て！」

夢はそう言うのとまた廊下を走って行った。

あの話か……。

たいちは急いで着替えると家を飛び出した。たいちの家からいつもの公園に行くには少し怖いトンネルを抜けないといけないのだが今は目をつぶり走りぬける。

「よし、着いた！」

たいちは少し息を切らせながらも公園についた。

「おっそーい！」

ななは今来たたいちに向って叫ぶ。

「ごめん、ごめん」

たいちは笑いながら先に来ていた陽、なな、和樹、夢のの所に行く。ななはたいちがこちらに来ると滑り台の上が上がってたいちと考えた話を話す。

「今から未来を変えよう！大作戦をはじめます！」

夢と和樹と陽はななが突然言ったので……と黙っている。陽はこの重い空気はまずいと二人に声をかけて

「おー」

ととりあえず言う。

「その作戦ってどんな事するのか？」

和樹が質問する、たいちは

「それを今から考えるんだよ。」

また重い空気になった、でもそれは陽の提案で払いのける。

「ん？その提案ってそれはお楽しみにー」

ななは笑って手を振る。

こうしてついになんたちの大冒険がスタートしたのだった。

気付いた事（前書き）

すみません；

これだけ謝つときます。

やっと、再新いたしました！

希望の未来へ！、復活です！！

気付いた事

その次の日。

今日は格段と暑い。

ななとたいち達、五人はあまりにも暑すぎるのでプールに行く事
にしていた。

それからプール場の前にみんなが集まると昨日のことを思い出し
たかずきが

「そつえばいつ作戦を実行すんだい？」

と持って来ていたひんやり冷たいジュースをみんなに配りながら陽
に聞く。

「それはまたこのペンダントが光らないとなあ」

困って陽がペンダントに目を向けていた時だ。

突然、たいちの頭の中に直接声が響いてきた。

『ペンダントを使いたくば虹のトンネルを見つけれ』と――。

その声を聞いたたいちは即座にみんなに知らせる。

「お、おい。さつき」ペンダントを使いたくば・・・」とかいう声
が聞こえなかったか？」

しかし、四人とも首を横に振る。

（じゃあ、何だったんだ？）とたいちが思っていると、ななが？マ
ークを浮かべて口を開いた。

「あれ、でもこの前はそんなことしなくても行けたよね？」

すると、その横にいた陽は突然ゾツとして顔を青ざめさせた。

「やばい！もしかしたら、日本と中国の沈没って……！」

「ちんぼつつて？」

とかずきがのんびり聞き返す。そんなかずきの肩をつかむと激しくかずきを前へ後ろへとゆらしながら叫んだ。

「中国が日本を乗っ取るのとの関係があるかも知れないってことだよ……！」

夢はそんな陽を見て、驚いた表情になっている。

「すごい……。意味が分かんないよ」

「そこちがうだろ！」

たいちは半分ふざけて夢をすばやくつつこむ。

そのあと、ふとななを見ると真剣な表情になっている。

「つまりはさ、日本の植民地化を食い止めないと日本と中国大陆は沈没ってことでしょ」

となながつぶやくように少し小さな声で言った。

たいちはそこで大事な事を陽に聞くのを忘れていたことにきづく。

「陽！日本沈没の日と植民地化される日っていつだ？」

そう聞くと向い側にいる陽はハッと目を開いた。

「そうだ、日本と中国大陆が沈んだ日は確か……。うーん。20

XX年の九月だったぜ。えーと、それで植民地化されたのは同じ年の八月くらいだったな、うん」

ななは夢に今何年か聞く。夢は20XX年だよと答えてくれた。そのことを聞いたなな。一瞬にして背筋が凍った。それから、大声でつい言ってしまう。

「たしか、20XX年の次は20XX年だ！」

陽以外はその言葉を聞き、硬直してしまった。が、たいちが最初に硬直を解くとゴォ！と燃えだした。

「でも、その未来をオレ達が変わるんだろー！」

相変わらずの熱血ぶりなたいちはそれから、「な！」とななの肩を軽く叩く。

ななは目線をたいちに向け「うん」とうなずいてから、みんなに言った。

「だよな、まだ硬直は早い！後一年あるんだし、はやいところ変えちゃおうよ」

明るく言い終わると、陽、かずき、夢はそれぞれ「そうだよな」など頷いたりしていて、顔は強気になっている。

それから、夢が手で顔をあおぎながら、からかうような笑みを浮かべる。

「ねえ、早くプールに行こうよ。兄ちゃんが燃えたからよけい暑くなっちゃった」

と夢が言い終わると、みんながドツと笑った。

そして、笑い声をあげながら気持ちを遊びモードに切り替えた五人は楽しそうにプール場の入り口へと入って行ったのであった。

〓 続く 〓

気付いた事（後書き）

フィクションです、これはあくまでもフィクションです！！

ミウロ（ミスゴロウ）「何言ってるの、作者」

見れば分かるじゃん！

では、続きもあとでぼちぼち書いて行きますかあゝ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3898m/>

希望の未来へ！～少年たちの武勇伝～

2011年10月7日13時57分発行